

## 公益社団法人日本心理学会研究集会等助成金 成果報告書

代表者氏名	高野裕治	所属	東北大学
研究会等名称	表情の社会的機能とユニバーサリティ研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数（会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください）</p> <p>会員 10名（うち認定心理士 0名） 非会員 8名（うち認定心理士 0名）</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>本会では、表情機能について、顔の表情筋による表情という制約を超えることで、動物種を超えて、生物に共通する社会的機能を議論している。本会では、これまでにヒト、犬、げっ歯類における共通性の議論からはじめ、魚類や頭足類、さらには昆虫や食虫植物における表情機能の拡張可能性について取り扱ってきた。</p> <p>今年度は、これまでの議論で不足していた靈長類、ネコ科の話題提供と、昆虫における表情研究の可能性をさらに探ることに取り組んだ。具体的には、靈長類については鹿児島大学の藤田志歩先生に大型類人猿のゴリラにおける嗅覚機能、ネコ科については九州大学の細谷忠嗣先生に動物園で飼育されているライオンへのエンリッチメントについて話題提供いただいた。ゴリラの嗅覚研究はまだ萌芽期であり、表情研究の発展可能性を議論することができた。また、ライオンについては、動物園での異常行動を防ぐために駆除された鹿肉など（里山などにおける獣害被害のため）を皮ごと提供する屠体給餌の方法について知ることができ、表情を観察する有効な方法にもなりうるかどうかを議論することができた。昆虫については、九州大学の櫻木耕平先生からはバッタのフンけり行動、大崎遙花先生からはリュウキュウクチキゴキブリにおいてオススメが翅を食べあう行動について話題提供いただいた。バッタのフンけり行動については未だその機能が未知であること、リュウキュウクチキゴキブリが雌雄で互いに食べあう行動というのは、世界初の発見であることを知ることができた。以前にも話題提供いただいたアリの専門家の九州大学の村上先生にも参加いただき、昆虫で心理学をする意義や、コミュニケーションシグナルを表情と捉えて生物の共通性を議論する意義などについて議論することができた。</p> <p>ヒトの表情をどの生物種まで拡げて議論することができるかについては、まだ正解はもちろんわからない。しかし、心理学を超えて、行動生態学の諸先生も交えて知見を交流させることができており、学際領域の構築が順調に進展している。次年度以降もより広範囲の動物種において議論を深めていきたい。</p> <p>新型コロナウィルスの流行が継続しており、九州大学を主会場とした対面形式（6名）とZoomを用いた遠隔参加（12名）の併用により、研究会は実施した。遠隔参加を積極的に活用したため、日本中広範囲からの研究会参加を実現することができ、非常に有意義であった。このため今後も対面と遠隔の併用によって、より多様な参加者を集めることを試みたい。</p>		

## 研究集会参加者リスト

＜研究会名＞				
表情の社会的機能とユニバーサリティ研究会				
研究集会開催日： 2021年 3月 24日( 水 )				
	氏名	所属	会員	認定 心理士
1	高野裕治	東北大学	○	
2	中嶋智史	鹿児島純真女子大学	○	
3	請園正敏	国立精神・神経医療研究センター	○	
4	魚野翔太	国立精神・神経医療研究センター	○	
5	齊藤俊樹	東北大学	○	
6	高野春香	東北大学	○	
7	須藤竜之介	九州大学	○	
8	高岡祥子	立正大学	○	
9	齋藤慈子	上智大学	○	
10	綱島茉有子	関東マツダ	○	
11	十川俊平	大阪市立大学		
12	櫻木耕平	九州大学		
13	細谷忠嗣	九州大学		
14	大崎遙花	九州大学		
15	村上貴弘	九州大学		
16	藤田志歩	鹿児島大学		
17	笠原好之	東北大学		
18	池田譲	琉球大学		
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				

(様式5)

2021年 3月 31 日

日本心理学会研究会

年度会計報告書

研究会名称 表情の社会的機能とユニバーサリティ研究会

研究会番号 20,021

助成金額 ￥30,000

年 月 日	項 目	金 額
2021年3月24日	講師謝礼（櫻木耕平先生）	￥10,000
2021年3月24日	講師謝礼（細谷忠嗣先生）	￥10,000
2021年3月24日	講師謝礼（大崎遥花先生）	￥10,000
支出合計		￥30,000